

年間第15主日

第一朗読 イザヤ 55・10-11

福音朗読 マタイ 13・1-23

2023.7.16 9:30 ミサ

カトリック高円寺教会

主任司祭 高木健次神父

今日の第一朗読はイザヤの預言が朗読されましたけども、その第一朗読の内容は、神様のみことばに対する信頼ですね。神様のみことばは必ず実現するということを宣べている預言者の箇所でした。

この第一朗読で読まれましたイザヤの預言の55章、この預言者がこの言葉を人々に伝えようとしていた時代というのは、聖書と典礼の説明にもありますけれども、神の民、イスラエルの民がその国を失っていた、その時代に当たります。エルサレムの都がバビロニアという帝国によって占領されて、王様が殺されて、そして神殿が破壊される、そして国が無くなる。そんな時代なんです。

神の民にとって、自分たちが神様に守られている、神様に選ばれた民であるということを実感する、そういうものは、それまで国があった時代は、神様が与えてくださった土地がある、そしてその土地の中心には神様が自分たちの中いらっしゃることを表わす神殿ある、その神殿では祭儀が行われている、そして自分たちを導くために神様から遣わされた王様がいる。王様と神殿と国土、この三つが、自分たちが神様と繋がっているということのしるしであったわけです。

しかし、その全てが失われた時代にあって、預言者は「神様との繋がりが全て失われたのではない。最も大切なことは、一人ひとりが心の中に留めることができる神のみことばなんだ」ということを言うわけです。聖書が編纂され始めたのも、実は、国が滅んで、全ての目に見えるしるし、王様だったり、国土だったり、神殿だったり、また神殿での祭儀であったり、そういうものが失われた時代だと言われています。目に見えるしるしが失われ、しかしもっとも大切なことは神のみことばに従う一人ひとりの心の中にある、そのみことばに従うことで、またそれを次の世代に伝えていくことなんだということが強調されるようになったと。

このことは、わたしたちキリスト信者にとっても、みことばこそが信仰の中心であるということを思い出させてくれる歴史であるということが出来ます。ちょっと想像できないけれども、でも、たとえばバチカンが無くなっちゃう、教皇様が——「ローマにパパ様いらっしゃる」っていうカトリックのカルタがあり

ましたけど——でもローマにパパ様がいらっしゃらなくなる（そういう時代もかつてありました）とか、あるいはこの日本においてもこのように教会として集まる土地が無くなる、教会という建物が無くなったとしても、それで信仰が失われるのではなく、一人ひとりの中に神のみことばがある限り、それは続いていくのだということは、昔のイスラエルの民だけではなく、今を生きるカトリック信者であるわたしたちとっても言える大切な信仰の本質であると言っていいと思います。

しかし、神のみことばと言ったときに、あの聖書の分厚い本に書かれている言葉を一つひとつ暗記するとか、またそれを伝える、学んでいくということだけに限定して考えるならば、少し的外れてしまうかもしれません。もちろん聖書そのものが大切ですけれども、一番大切なのはその聖書に籠められた神様のメッセージの全体像を受け取る、その中心を受け取ることです。それは何であるかを、イエス様が、みことばご自身である方が人となって示してくださったと信じているのがキリスト教です。聖書に籠められたメッセージを一言で言うならば、「神様はわたしたちを愛しておられる。神様は一人ひとりを大切に思っいらっしゃる」というこのことに尽きると言ってもいいでしょう。そのことを土台にしてあの分厚い本の聖書に書かれたことを理解していかなければ、何かばらばらになって、非常に部分的なことを切り取って、時には違うメッセージにたどり着いてしまう可能性ということはあるわけです。

神様はわたしたちを愛しておられるということが、絶えず、聖書全体の、そしてわたしたちがその聖書に基づいて執り行っているこのミサという儀式の中心テーマである、そのことが明確な言葉として出てこなくても、絶えずそれは土台にあるということになります。

しかし、人生の経験の中で愛されたこと、大切にされたという実感を持ったような経験がない場合は、たとえ「神様がわたしたちを愛しておられる」と言葉で言われても、その内容がぴんとこない、あるいはそのことそのものを素直に受け入れることができない。言葉だけでは現実に繋がっていかない、ということも事実なわけです。ですから、お互い同士の中でほんとに大切にされた、愛されたという経験を与え合う、そのことが、実は神のみことばを伝えていくことの第一番目のステップであると言わなければならないわけです。逆に言うならば、たとえキリスト教という信仰を持った人でなくても、あるいは信仰を伝えようとしたのではない場合であっても、自分に対して大切にしてくれた人、愛してくれた人の思い出というのは、みことばを伝えてくれたと言ってもいいということになると思います。

わたしたちは既に自分の人生の中で愛される、大切にされるという出来事を通して与えられた体験に支えられていると言ってもいいのではないかなと思います。その出来事というのは過去のものとして過ぎ去って行くのではなくて、一人ひとりの中に留まって、今でも光を放ち、力を与え続ける、そしてそのような体験があるからこそ、聖書を通して、また教会を通して宣べ伝えられた神様の愛ということに出会っていき歩を進めることができると言えるでしょう。

わたしたちは既に与えられている体験の中に、愛のみことばの種——今日の福音ではみことばってというのは種になぞらえられていましたけども——を見出すように招かれているのと同時に、お互い同士を大切にし合うことで、みことばに触れるための出発点である体験を与え合う、それこそが神様の御業に協力するという、そのことに招かれているとも言えると思います。一人ひとりの中に既に与えられている体験の中に、神のみことばに心を開く準備のための力があるのだという思いをもって、改めて今までの歩みを振り返ってみる、そしていろいろな形で愛や大切にされるっていうことを教えてくれた人々への感謝を新たにしたいと思います。

また、わたしたちが、互いに神様が一人ひとりを大切にされているという——直接そのことを言葉にしなくても——そういう体験をお互いにもたらし合うことができるように、神様の導きと、そして力付けていただくその歩みをするように、一人ひとりの中にみことばを留め、そのみことばによって導こうとされる神様のみ旨に心を開く、その思いで、このごミサを通してまた恵みを頂きたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>